世界一危険な航空機「MV22 オスプレイ」

岩国基地陸揚げ阻止行動・さらに沖縄への配備阻止に向けて！

「リムピース」共同代表・岩国市議　田村　順玄

毎年５月５日の「こどもの日」、日米親善デーと称して米海兵隊岩国基地が開放される。１年でたった１回だけ一般市民が入場が許されるこの日、岩国基地へは全国から多くの人が訪れる。２０１２年の５月５日、今年の日米親善デーには実に 28 万人の人が入場したと基地側の発表があった。

私が世話人をしている「ピースリンク広島・呉・岩国」と「リムピーク」のメンバーは共同し、毎年、入場者に反基地を訴えるチラシを配付し街頭宣伝を行っている。今年は、裏面に展示される航空機を図示した反基地を訴えるビラは好評で、用意した３０００枚余は一時間もかからず配付を終えた。

厚木からの艦載機移転によって、１・４倍に拡張された滑走路が沖合１キロメートルに移転しても爆音被害の軽減にはつながっていない現実を、市民はよく知っている。ところがこの日ばかりは、日米親善一色で私たちの訴えもシックリとは伝えきれない。それでも、私たちの「蜂のひと刺し」の如きこうした行動にエールをおくる人々の姿もたくさんいて、勇気が湧いてくる。

ひとりだけ基地入場を拒否された私

その 28 万人が入場する基地開放行事に、たったひとりだけ、米軍から入場を拒否された市民がいた。それは私・田村順玄である。

昨年９月に開催された海上自衛隊の公開行事の際、基地内に入場した直後に自衛隊から退出を求められ、３時間ものすったもんだの末に退出を余儀なくされた。米軍に間借りしている海上自衛隊が米海兵隊側から「田村順玄の入場を認めない」という達しがあることが理由だった。

さて今年の基地開放で私はどのように扱われるのか。ビラ配付行動にさきがけて米軍側の動きを確かめるために実験を試みた。取材のマスコミ各位も多数同行し、何千人もの入場者でごった返す入場門を 10 分以上かけて入口に近づく。ところが米軍敷地にかかったとたん十人をはるかに越える警備要員に取り囲まれ、その位置から入場を阻止された。身分の確認もしないのに、「田村さんの入場を米軍は拒否します」という趣旨の通告で理由の説明もしない。

後日、私は米連邦政府の情報公開制度である「ＦＯＩＡ」の手続きで、入場拒否に至った関係書類の開示を求めた。１ヵ月後、米軍ＦＯＩＡの担当部局から届いた書類には拒否の理由はいっさい示されておらず、「米軍側は入場を拒否することが出来る」という数行の文字が書いてあっただけだ。

結局、20 年近く在日米軍の秘密をあばき続け活動を続けている「リムピース」は、目の上のコブであるという米軍の本性を見た、今年の「日米親善デー」のひとこまであった。

岩国基地沖合移設と絡んだオスプレイ配備

話を元に戻すが、12 年前の２０００年５月５日の「日米親善デー」で、私たちが配ったＢ５判のチラシが一枚手元に残っている。

見出しは、

基地拡張工事が完成したら……次に来るのは「ＭＶ22 オスプレイ」？　岩国基地はアジアの要に！

そして本文には、

新しい沖縄の基地で使用する航空機はＭＶ22 オスプレイと呼ぶヘリコプターに変わる新型機です。この飛行機はまだ開発中ですが先月８日にも事故を起こし、これまでに 15 機製造して３機墜落、20 人が犠牲になるという危険極まりないものです。海兵隊は８年後、オスプレイを 24 機「沖縄」に配備すると言っています。それは丁度、岩国基地の拡張工事が完成する頃、岩国が大変重要な「オスプレイ」の訓練基地となることは間違いないでしょう、とある。

今回、米軍がオスプレイの沖縄に配備するとの「接受通報」を日本政府におこなったが、そのスケジュールが、私たちが当時配った文面と驚くほど一致していることにあらためてビックリ。当時は２００８年配備と言っているが、岩国基地の沖合移設事業の完成は３年遅れ、その後もオスプレイは事故を繰り返した。こうした中でやっと日本へ強行配備という事態になったのだが、当時、私たちのチラシが予告したオスプレイ配備の日程が、岩国基地の沖合移設事業などと密接に絡みあった計画的な企みであり、その指摘が正しかったことがわかる。

ゴムボート船団で会場抗議行動

「グリーンリッジ」が岩国基地沖に現れた。前日、韓国の「プサン港」を出港し関門海峡をくぐって９時間。予定どおり午前５時過ぎに米軍の専用岸壁に接岸したグリーンリッジは、さっそく陸揚げを開始した。上空には取材のヘリコプターが何機も飛び、陸上からは知る術も無い状況が刻々と報道され、私たちもそこから事態の進展を知るだけだった。

午前４時頃から、続々と集まった配備反対を訴える多くの人々がグリーンリッジの見える対岸土手に集まりはじめた。当日の陸揚げ阻止を訴える「７・13 オスプレイ陸揚げ・配備阻止岩国大行動」実行委員会のメンバーを中心に、全国から集まった多くの人々の姿がそこにあった。現地生中継を控えた報道陣の姿も一杯で、近くの道路にはテレビの中継車が何台も並んだ。

実行委員会が準備した海上抗議行動のゴムボート船団も出航の準備を整え、午前６時前には海上に繰りだした。米軍専用岸壁に接岸したグリーンリッジの入港阻止こそできなかったが、入港現場に可能な限り接近し抗議の声を高めることで、今回の強行陸揚げ・配備の不当性をアピールする効果は大きかった。現場海域は厳しい米軍の水域制限が掛かっており、港に近づけない。そのうえ全国から動員した海上保安庁の巡視船や艦艇がコムボート船団の行方を阻み、彼らの移動する波で船体も翻弄される。

私もゴムボート船団の指揮船として地元で借り上げた小型舟に乗り込み、海上行動に参加した。陸上からの熱い激励、米軍抗議の声に励まされ抗議船団と２時間以上も周辺海域でのアピール行動を繰り広げた。この模様はリアルタイムに全国へテレビ中継され、翌日の新聞紙面でも大きく報道された。その間も、グリーンリッジからは１時間に１機の割合でオスプレイの陸揚げが続き、同日夕刻には 12 機すべての陸揚げ

を終了した。グリーンリッジは休む間もなく、同じ日の夕刻には沖縄・那覇軍港へ向け岩国基地を後にした。

岩国から沖縄への送り込みを阻止

陸揚げ２日後の７月 25 日、オスプレイは早速エンジンをかけ、白いオイルのけむりを上げながらローターを回転させた。

後は日米政府との「約束」と言われるモロッコやフロリダの事故報告の確認後、岩国基地での試験飛行を行い、沖縄への配備が予定通りという感じですすめられている。

今回のオスプレイの日本持ち込みに際し、防衛省は米国側の説明をすべて鵜呑みにし、それを数々の新しい事実として明らかにした。日本でのオスプレイ運用に向けて行ってきた「環境レビュー」では、今後、オスプレイは、普天間基地を拠点に岩国基地や「米軍キャンプ富士」などを使って、日本全土で訓練飛行を展開するという。しかもその訓練の目玉は、全国に張り巡らされている低空飛行ルートを使った訓練である。

米軍の「低空飛行訓練」について私たちリムピースは、15 年以上前からその実態を明らかにし、告発を続けてきた事実がある。米軍の低空飛行が原因で起こった事故や事件は数限りなく、ダム湖の上に張られたワイヤーに引っ掛かり墜落した事故や、最近では昨年３月の岡山県津山市で起こった土蔵倒壊事件などが記憶に新しい。

オスプレイは沖縄配備後は全国６本の低空飛行ルートで３５０回の超低空飛行訓練を行うと言い、その訓練高度は東京タワーの高さの半分以下の１５０メートルであると言い、最近の国会答弁ではその高度はわずか 60 メートルという説明もでてきた。これだけ危険なオスプレイが、この上「超低空飛行」を国民の頭上で行うことなど到底認められないことであり、さすがに全国の県知事なども配備や訓練の実施反対を打ちだしはじめた。

いまやＭＶ22 オスプレイの配備は、国民的な大反対運動へと発展しており、このまま岩国基地からアメリカへ送り返すことも不可能ではなくなった。沖縄では９月９日、台風で仕切り直しとなった県民集会が大きく盛り上がり、配備阻止への大きな力となっている。それだけに、岩国から沖縄へのオスプレイ送り込みを阻止する私たちの責任は重大である。

配備反対を明らかにした市長だが

いま、岩国基地の駐機場にオスプレイ 12 機が勢ぞろいしている中で、私たちは手をこまねいているだけではない。岩国市民は３年前、全国の基地で取り組んでいる爆音訴訟をいちばん最後に立ち上げ、全国の基地の街の仲間とがんばっている。その、６５４人の原告で取り組む岩国爆音訴訟団はオスプレイの陸揚げ後、直ちに具体的行動を起こした。

この爆音訴訟の提訴要件に「オスプレイのエンジン始動、試験飛行の差し止め」を一項くわえ、司法の判断を求める行動を起こしたのだ。８月３日には、山口地裁岩国支部に訴状を提出したが、今後の審理に注目したい。そしてこの行動は、全国各地に被害を拡散させるオスプレイの低空飛行訓練を阻止するためと、全国各地の爆音訴訟団が岩国の後に続き、オスプレイの配備阻止・飛行禁止を求める裁判行動が広がることを望む行動だ。

さいわい、今回のオスプレイ配備ではこれまで国の艦載機の移駐問題に協力的だった岩国市長も、「配備反対」の意思を明確にしており、現時点では地元首長としての公式な同意を国には伝えていない状況だ。間もなく森本防衛大臣が直接市長に面談し、モロッコ事故の報告などを携え、「問題なし」という通告することが予想される。こうした政府の動きをくい止めることと、市長の軽々な答弁をださせないためにも、市民の強い後おしが必要だ。

7月 23 日の陸揚げ行動を牽引した「岩国反対行動実行委員会」は、先日、岩国市長へ、こんにちの状況の中では「配備反対」を唱えるだけではなく、具体的な配備阻止の行動にでるよう要請をした。その一つは、岩国市長として、予想されるアメリカ側からの「安全である」「オスプレイの危険な実態に懸念はない」との報告に対し、あらかじめその調査の基準を明らかにしておくこと、また、岩国市としても「何をもって安全であるか」を確認できる基準をあらかじめ市民に明らかにしておくこと、を求めた。

さらに、市長の配備反対の意思を市民と共有するためには、市としての姿勢を示した「懸垂幕」を市庁舎に掲げること、市報などの広報で広くその意思を伝えること、大型映像装置やケーブルテレビなどで岩国市としての立場を広報すること、を提言した。

そのうえで、市民集会や国の説明会開催などで市長として態度が曖昧にならないようしっかり監視していくことを「岩国反対行動実行委員会」は確認し、市長の今後の動きを牽制した。これは７月２９日の山口県知事選で当選し、８月末から任期がスタートする山本繁太郎新知事へも就任後早々に要請する予定だ。

難題に真正面から立ちむかう

岩国では本年 12 月 13 日、全国で 99 番目、恐らく地方空港としては最後になる「岩国錦帯橋空港」が開港する。これは、国の米軍再編施策「アメとムチ」の、アメに当たる岩国基地を使った民間空港の開港という県・市の目玉施策である。

この超危険なオスプレイが飛ぶ岩国基地、海兵隊のジェット戦闘機や厚木基地からの空母艦載機が飛ぶ岩国基地の開港を、市長は「リンクしない」と平静を装う。だが、日米政府が必死に進めるオスプレイの配備に反対を唱えながら、米軍に「協力と譲歩」を求めて飛行許可を受け運航する岩国錦帯橋空港が、正常な形でこのまま開港できるのであろうか。

市長や県知事が、この 12 月 13 日という開港スケジュールに重なるオスプレイの展開を今後どのように棲みわけしていくのか。その成り行き看過できない。状況を冷静に監視する必要があるし、また安易な解決策は望みたくない。

８月 12 日。きょうは私の誕生日である。私は先の戦争が終わる３日前に旧中国で生まれた。あれから 67 年目の夏がきた。これまで岩国基地とともに過ごしてきた 66 年間であったが、とりわけ今年はＭＶ22 オスプレイで揺れる岩国の夏が目の前に横たわる。私はいまこそこの難題に真っ正面から立ち向かい、さらに果敢に取り組みを強めて行きたい！

そんな思いに馳せる２０１２年夏。イワクニからの報告である。

（２０１２年８月１２日）